文化という言葉の効能について

木下　聖三

目次

1.　文化という言葉の誤用
2.　文化という言葉の範疇
3.　文化という言葉の効能

1.　文化という言葉の誤用

柳田國男があるエッセーの中で「文化という言葉の誤用を正すべきだ」と説いている。

> 地図の日本を、ぢつと見つめて居ただけでも、まだ少しは国といふことを考へる機会になるだらう。文化という言葉などは、主としてこの目的のために設けられたものなのだが、何分にも新語であり、又翻訳によつて知つたのが始めなので、毎日口癖のやうに使つて居りながらも、是をお互ひの集合生活の問題とは思はずに、何か外から来た人に見られるものの名の如く、体裁とか体面とかに近いもののやうに、心得て居る人ばかり多いのは困つたことである。今日の普通教育は、文化の本義の穿鑿よりも前に、先づこの俗用の誤りを正すのが急務ではないかと私は思

ふ。

（柳田「考へない文化」［2000：249］）

地図とは、三次元空間（あるいは四次元時空間）を二次元平面に落とし込むことによって、人に世界を見渡せしめるツールである。翻って、文化という言葉もまた、雑多な全体を対象化するためのツールだ、と柳田は言っているのである。

文化を地図にたとえたのは柳田だけではない。たとえば、クライド・クラックホーンもこう述べている。「文化とは地図のようなものである。地図が土地そのものではなく、特定の地域を抽象的に表現したものであるように、文化はある人間集団の言語、行動、人工物にみられる統一性を志向する傾向を抽象的に記述したものである。地図が正確で地図の見方もわかっていれば、道に迷う心配はない。ある社会の文化がわかっていれば、そこでの暮しで戸惑う心配はない」（『人間のための鏡』［1971：35］）。

が、同時に、「何分にも新語であり、又翻訳によつて知つたのが始めなので」、心得違いをしている者が多く、したがって、文化という言葉はもはや所期の目的を果たし得ていない、と言うわけであろう。

当時（1952年）における文化という言葉の「俗用」とは、おそらく、たとえば「文化生活」や「文化住宅」といった大正期以来の用例に見られるような、「便利」や「新式」という意味合いの込められた用語法のことだったのではないか。

石田英一郎が注目しているように、『広辞林』では「文化生活」の項に「西洋かぶれして新しがる生活」という語釈も付されているのである（石田「文化の概念」［1976：39］、ただし下線強調は木下による）。

といって、「伝統」を指し示す用法に立ち返れば良いというものでもないだろう。結論から言えば、松田素二の言うように、そのような表象には社会の再生に資する効能が見込まれる一方で、人々に同化を強いる副作用が伴う

（松田「文化／人類学」［2009：28-31］）。

そういうわけで、都度、無毒化（≒非政治化≒無目的化）が施され続けて、「いっさいの含意を有しながらも、正確には何も意味していない」（イリイチ『生きる意味』［2005：378］）ところの「アメーバ・ワード」が出来するのであろう。私はしかし、今少しこの流れに抗って、文化という言葉の本義を見定めることにチャレンジしたいと思う。

2. 文化という言葉の範疇

翻訳前に遡るならば、といっても、米英独仏間で相互に翻訳され続けるうちに、彼の地でもやはり「アメーバ・ワード」と化してしまっているわけだが、ここは（逐一語義の変遷を追うのでなく）ひとまずシンプルに、本義への見通しを立ててくれそうな、トーマス・スターンズ・エリオットによる分類を参照することにしよう。（以下、「culture」とその音写語については全て、表記を「カルチャー」に統一する）。

> カルチャーという用語は、われわれが一人の個人の発展を念頭におくか、一つの集団もしくは階級の発展を念頭におくか、もしくは一つの社会全体のそれを念頭におくかに応じてそれぞれ異なる連想をともないます。
>
> （エリオット「文化の定義のための覚書」［1971：239］）

エリオットはカルチャーを個人のフェーズ、集団のフェーズ、社会全体のフェーズの三層に分け、続けて論者による力点の違いを論じている。語義の決定に影響を及ぼした論者として、マシュー・アーノルドとエドワード・バーネット・タイラーとを挙げ、アーノルドはもっぱら個人のフェーズを、タイラーは社会全体のフェーズを問題化した、と述べるのである。

今少しエリオットの見立てをクリアにするために、タイラーによる定義を確認しておくと――

広い人類学の意味でいう文化あるいは文明とは、知識・信仰・芸術・法律・習俗・その他、社会の一員としての人の得る能力と習慣とを含む複雑な全体である。

（タイラー『原始文化』[1962：1]）

タイラーは文化と文明を区別しない、実は特殊なカルチャー観を提示しているのである（事実、タイラー的な用法は一般には普及しなかった模様である）。

さて、鏡味治也によれば、アーノルドでもタイラーでもなく、（両者の力点ともを視野に入れた）エリオットこそが「階級ごとに異なる文化の可能性を示唆」し、「二〇世紀後半に興隆するカルチュラル・スタディーズの重要な伏線となっている」（鏡味『キーコンセプト文化』[2010：82]）。（以上をまとめると、表1.0のように整理することができよう）。

表1.0　鏡味＝エリオットから見た各人のカルチャー観

個人のカルチャー	集団のカルチャー	社会全体のカルチャー
アーノルド	∅	タイラー

ところが、小田亮によれば、タイラーのカルチャー観はアーノルドに始まるカルチャー観への異議として機能してきたのであり、その人類学的な概念こそがカルチュラル・スタディーズを可能にした次第なのである（小田「文化人類学とカルチュラル・スタディーズ」[2006：203]）。（以上をまとめると、表1.1のように整理することができよう）。

表1.1　小田＝タイラーから見た各人のカルチャー観

個人のカルチャー	集団のカルチャー	社会全体のカルチャー
アーノルド	タイラー	

たとえば日本語が誰がしかによる発明品ではないことからも分かるように、たとえ独り言であっても、個人がそれを所有することは原理的に叶わない（ルートヴィヒ・ウィトゲンシュタイン流に言えば、「私的言語」は存在

し得ない［1997：175 ff.］）。タイラーのカルチャー観を徹底するならば、文化というものは並べて共有されるものなのであって、「個人のカルチャー」なるものの存在など幻想に過ぎないと見ることができる。（とすれば、表1.1 は表 1.1.1 のように整理し直されるべきなのかも知れない）。

表 1.1.1　小田＝タイラーのカルチャー観

個人のカルチャー	集団のカルチャー	社会全体のカルチャー
∅	タイラー	

19世紀イギリスで流通したカルチャー観をめぐっては、また別の見方もある。富山太佳夫は「この〔アーノルドの〕主張のどこをどう曲解すればエリオットのそれのような批判がでてくるのか、奇怪と言わざるをえない」と述べる。

> 教養とは完成を学ぶことであるが……人間にとっての真の完成とは、われわれ人間のうちにあるすべての側面を発展させながら調和のとれた完成にいたること、そして、われわれの社会のすべての部分を発展させながら全体的な完成にいたることであると考える方向にわれわれを導いていく。
>
> （アーノルド『教養と無秩序』［1946：17］ここは富山の示した訳文［2003：290］に従う）

明らかにアーノルドはカルチャーなるものに、個人の「調和のとれた完成」をめざす部分（恐らくこれは教養と訳していいだろう）と、社会の「全体的な完成」をめざす部分（これを何と訳すべきだろうか、かりに文化と訳してもほとんど用をなさないはずである）の表裏一体をなす二つの面を認めている。彼の言うカルチャーは個人と集団・社会の双方に同時に関わるのであって、その意味合いは教養、文化のいずれの語によってもカバーしきれないのだ。最初にそのことを了解しないかぎり、教養、文化をめぐるいかなる議論も貧しいかたちでしか展開しないであ

ろう。

（富山「教養と国家」[2003：291]）

文献学的な再検証は別の機会に譲ることにして、今は富山の読みが指し示すカルチャーの様相を書き留めておきたい。富山によれば、アーノルドは個人のカルチャーと集団のカルチャーの双方を同時に、その視野に収めているのである。（以上をまとめると、表1.2のように整理することができよう）。

表1.2　富山＝アーノルドから見た各人のカルチャー観

個人のカルチャー	集団のカルチャー	社会全体のカルチャー
アーノルド		タイラー

先に（タイラーのカルチャー観のうちに）「文化というものは並べて共有されるもの」というテーゼを見たのであったが、これに対しては分有という概念を立てることができるだろう。ジャン=リュック・ナンシーの提起した分有概念は次のように要約され得る。「人間はばらばらに分割されているが、まさしくそのように分割されていることを共有する」（浅田彰「共同体の否定神学を超えて？」[2001]）。たとえば、会話の最中にあっても、その意味は取り違えられ続ける。ひいては、集団さらには社会全体のカルチャーの方こそ幻想の産物なのであって、それはせいぜい分有されるに過ぎないものなのである。

富山は続けて、「別の言い方をするならば、彼が模索して発見したのは個人と社会と国家をつなぐ新しい概念であった」とも述べていて（富山「教養と国家」[2003：294]）、したがって、集団と社会全体を区別すべきではないのかも知れない。アーノルドの視野はむしろ社会全体にまで及んでいると言うべきなのであろう。（とすれば、表1.2は表1.3のように書き換えられる

表1.3　富山＝アーノルドのカルチャー観

個人のカルチャー	集団のカルチャー	社会全体のカルチャー
アーノルド		

べきなのかも知れない)。

念のために繰り返すが、本稿では「アーノルドが本当はどう見ているのか」が問題なのではなく、「カルチャー」というこの「アメーバ・ワード」の意味合いをトレースできるような白地図を手に入れることこそが問題なのである。

ところで、富山に言わせれば、カルチュラル・スタディーズの始祖はエリオットでもタイラーでもなく、アーノルドである。

> アーノルドの言う教養および文化の概念が、のちに人文的な教養なるものに矮小化されてゆくとするならば、その責任の大きな部分はのちの時代にあるとせざるを得ない〔中略〕。逆に、彼の文化概念が、その有機体的な基底のゆえに結果的には保守的なものにならざるを得ないにしても、今日のカルチュラル・スタディーズのひとつの大きな始まりであったことは否定できないのである。
>
> (富山「教養と国家」[2003:300])

カルチュラル・スタディーズの始祖探しには、カルチャー観の正統性を問う意味があるだろう。ここで複数の始祖候補者を募り得たことは、すなわち複数のカルチャー観に触れ得たことを意味しているのだと思う。

3. 文化という言葉の効能

前章を通じて、私は文化概念の白地図をほぼ手中に収めることができたと思うのだが、同時に、そこに境界線を引く営為が何らかの政治性を帯びてしまうことも思い知らされた。

たとえば鏡味の次のような言葉から――

> 一九世紀前半にドイツ語圏で生じた文化概念の意味転換は〔タイラーを通じて〕、後の〔アメリカ〕文化人類学の文化概念を用意しただけでは

ない。それはむしろ副産物であって、もっと重大で広範な影響を、ドイツ的文化観は一九世紀以後の社会変動にもたらした。それが西川〔長夫〕の言う文化概念の国家イデオロギー的側面であり、そこでの力点は、クローバーとクラックホーンが文化人類学の立場から論じた文化概念とは別のところ、つまり対抗概念としての概念定立に置かれていた。

（鏡味『キーコンセプト文化』［2010：26］）

あるいは富山の次のような言葉から――

彼〔アーノルド〕の考えた真の平等とは国家の内部における調和によって保証されるものであった。それが彼の有機体的な調和という考え方がはらんでいるひとつのテロスであることは間違いない。ここにあるのは理想的な国家であろうか、それとも幸福そうにみえる全体主義国家の予告であろうか。そのいずれと解釈するにしても、『教養と無秩序』とは、そのような評論であって、決して教養主義のバイブルなどではないのである。

（富山「教養と国家」［2003：308］）

タイラーの見方、アーノルドの見方のいずれにも、毒性がある。冒頭に引用した柳田の言葉もまた「文化という言葉は国家イデオロギーを構築するために設けられたものである」と言っているものと読める。しかしながら同時に、「だからこそ、線を引く際には、その効能を意識しなければならない」と言っているものとも読むことができるのではないか。

「それは好意的に過ぎる読み方だ」と言われようが、古典に対して能う限り好意的に臨むのは（「断罪してやろう」と意気込むより）むしろオーソドックスな姿勢であり、より創造的な読み方でもあるのではないか。

改めて前章の表を見直すならば、境界線の引き方には四通りあることが分

表2.0　エリオット的三分法

個人のカルチャー	集団のカルチャー	社会全体のカルチャー
教養	文化	文明

表2.1　タイラー的カルチャー観

個人のカルチャー	集団のカルチャー	社会全体のカルチャー
教養	文化	

表2.2　アーノルド的カルチャー観

個人のカルチャー	集団のカルチャー	社会全体のカルチャー
文化		文明

表2.3　全体主義的カルチャー観

個人のカルチャー	集団のカルチャー	社会全体のカルチャー
文化		

かる。(表2.0以下のように整理することができよう)。

線を引かない選択（表2.3）に政治的な効果が見込まれることは、もはや言うまでもないが、線を引き過ぎる選択（表2.0）にもまた、線を引かないのと同じ効果が見込まれる。ただただ切断したところで、アクターの抵抗力が削がれるばかりであろうからである。それでは、長いものに巻かれるのでも、誰彼構わず切り刻むのでもない、他の選択（表2.1または表2.2）には、どのような効果を見込むことができるのだろうか。(参考までに、表2.1と表2.2を展開すると、それぞれ表2.1.1、表2.2.1のようになる)。

タイラー的カルチャー観（表2.1＝表2.1.1）から導出される人間像は、「話せば分かる」という前提を共有しつつ、互いに関心を払う（ケアフルな）リベラリズムの原理に従って動作する社会的な存在であり、対してアーノルド的カルチャー観（表2.2＝表2.2.1）から導出される人間像は、「話せば分かる」という前提を立てず、互いに関心を払わない（ケアレスな）リバタリアニズムの原理に従って動作する動物的な存在である。

表 2.1.1　タイラー的カルチャー観の展開

<table>
<tr><th>個人のカルチャー</th><th>集団のカルチャー</th><th>社会全体のカルチャー</th></tr>
<tr><td>教養</td><td colspan="2" rowspan="3">文化</td></tr>
<tr><td>教養</td></tr>
<tr><td>教養</td></tr>
</table>

表 2.2.1　アーノルド的カルチャー観の展開

<table>
<tr><th>個人のカルチャー</th><th>集団のカルチャー</th><th>社会全体のカルチャー</th></tr>
<tr><td colspan="2">文化</td><td rowspan="3">文明</td></tr>
<tr><td colspan="2">文化</td></tr>
<tr><td colspan="2">文化</td></tr>
</table>

ここで言うリベラリズムとリバタリアニズムの対照は、おおよそマイケル・ウォルツァーの言う二つの自由主義に対応している。「(1) 第一の種類の自由主義（「自由主義Ⅰ」）は考えられうる最強の方法で個人的な権利を支持するものである。そして、ほとんどこのことから演繹されるように、厳格に中立的な国家、すなわち文化的および宗教的な企てを持たない国家、あるいは個人の自由や市民の身体的保証、福祉、安全を越えたいかなる種類の集合的目標も持たない国家を支持するものである。(2) 第二の種類の自由主義（「自由主義Ⅱ」）は――異なる帰属意識を持つ市民の、あるいはそうした帰属意識をまったく持たない市民の基本的権利が守られている限りにおいて――特定の民族、文化、宗教、あるいは（限られた）一連の民族、文化、宗教の存続や繁栄を支持する国家を許容するものである」（ウォルツァー「コメント 二つの自由主義」[1996：145-146]）。むろん、リベラリズムが「自由主義Ⅱ」に、リバタリアニズムが「自由主義Ⅰ」に対応しているのである。

ウォルツァーは続けて、マルチ・カルチュラリズムを希求する限り、「自由主義Ⅱ」（≒リベラリズム）は（その内部に存在する選択肢としての）「自由主義Ⅰ」（≒リバタリアニズム）を選択することになる、と述べる。この傾向を肯定するにせよ否定するにせよ、マルチ・カルチュラリズムはリバタリアニズムを要請するのだと言えよう。

「セキュリティ」という言葉が語源的には「関心のない（ケアレスな）状態」を意味することにも留意したい（東浩紀「情報自由論」[2007：64] 参照）。

そして、前者（表 2.1＝表 2.1.1）は文化の混交を志向するカルチュラ

ル・プルーラリズムと親和的であり、後者（表2.2＝表2.2.1）は文化の共存（分有という言葉に対応させるならば「分存」）を志向するマルチ・カルチュラリズムと親和的なのではないか。

カルチュラル・プルーラリズムとマルチ・カルチュラリズムとはそもそも区別されるべき志向なのかどうか定かでないのだが、本稿では両者を区別する野村達朗の議論に従う。野村によれば、カルチュラル・プルーラリズムが（たとえば共通の言語として英語の使用を強いるといった）国民の統合に向かう方向性を有しているのに対して、マルチ・カルチュラリズムはそのような統合の方向性を否定し、それぞれのカルチャー（それぞれの言語）の維持を擁護するのである（野村「アメリカにおける多文化主義とその限界」[1997] 参照）。

両者の違いはしばしば（すべてを溶融する）メルティング・ポットと（素材の原型を保持する）サラダ・ボウルの違いにたとえられるが（野村『「民族」で読むアメリカ』[1992：114-116, 203-204] 参照）、その違いは表2.1.1と表2.2.1にも表れているのではないか。たとえば、カルチュラル・プルーラリズムにおいて、マイノリティはメルティング・ポットの中で「集団的紐帯を放棄して個人になること」を要求されるわけだが、そのような集団と個人の対照など、表2.1.1によく表れているのではないか。

さほどシビアでないように見受けられるシーンにおいても、文化は「分存」している。現に「分存」状況にある諸集団を宮台真司は「島宇宙」と呼んだのであったが（宮台「社会は島宇宙化する」[2006：281]）、これなどマルチ・カルチュラリズムが単にイデオロギーであるばかりでなく、現実の一様相でもあることを示している。

つまり、文化という言葉をタイラー的に使うことは、リベラリズムやカルチュラル・プルーラリズムに与することを意味し、文化という言葉をアーノルド的に使うことは、リバタリアニズムやマルチ・カルチュラリズムに与することを意味するのではないか。

アーノルド自身はリバタリアニズムを許容する人物ではなかった。ゆえに実際には、（表1.3＝表2.3のような）全体主義的とも形容すべきカルチャー観を提示しているのである。こういう場合、一人の人物のうちに首尾一貫した一つの思想傾向が存在するという想定にこだわらず、（表1.2＝表2.2を掲げて）リベラリズムに反対するアーノルドと（表1.3＝表2.3を掲げて）リバタリアニズムに反対するアーノルド、二人のアーノルドが存在すると見た方が良いのではないか。

むろん「そのような断念は単に手前の知性が足りないからだ」と断罪されることを覚悟しつつ。

どこまで行っても、文化の本義に辿り着けそうにないが、この言葉に備わる政治性（≒効能≒毒性）から目を背けさえしなければ（表層的な誤用は避け得て）、柳田を困らせずに済むだろう。あるいはひょっとすると、（たとえばリベラリズムに反対したり、たとえばリバタリアニズムに反対したりといった）目的に応じて二様の政治性を帯びるということ自体が文化という言葉の本義なのではないか。そもそも人間は社会的にして動物的でもあるという二重性を有する存在なのであり、文化という言葉もその二重性を反映している方が道理だろうからである。

言葉の本義にもおそらく二種類あって、つまりコンスタティヴな意味とパフォーマティヴな意味とがあるのではないか。ここで言う「コンスタティヴ」と「パフォーマティヴ」とは、ジョン・ラングショー・オースティンが提起した通りの概念というより、ポール・ド・マンが転用した意味でのそれなのだが、要するに言葉には「文法」的な意味（文字通りの意味）と「修辞」的な意味（含意）とがあるというわけである（ド・マン「記号学と修辞学」[2012：3-23] 参照）。

そうであるとすれば、ここで私が従事したのは、文化という言葉の、いわばパフォーマティヴな本義を探求する作業であったのだと思う。翻って、「耕作」という意味のラテン語「cultura」に遡るなどする語源学的な作業は、いわばコンスタティヴな本義を探索する営為であったと言えるのではないか（こちらについてはアルフレッド・クローバー、クラックホーンやレイモンド・ウィリアムズらによる研究の蓄積がある。クローバー／クラックホーン「文化という言葉の歴史」[1991：77-142]、ウィリアムズ『キーワード辞典』「カルチャー」の項 [2011：138-148]、それぞれ参照。ウィリアムズはパフォーマティヴな意味の探求をも企図しているものの、「カルチャー」の項については、ハイカルチャーを意味する用法に込められた人々の敵意を言挙げするに留まっている）。その証拠に（クローバーとクラックホーンの共著論文を邦訳した）西川長夫もこう述べているのである。

> クローバーとクラックホーンは文化概念が人類学の中心的概念として形成されてゆく過程とその到達点に焦点を合わせた結果として、文化や文明のもっている国家イデオロギー的な側面や文明と文化の対抗的な意味、あるいはそれらが共に西欧的な価値として非西欧世界の解放と抑圧にどうかかわってきたかといった問題意識は希薄になっている。もともと文化概念は一種

の価値観であり、時代的なイデオロギーであるから、文化の問題を取り扱う場合には、そのイデオロギーの基盤を明確に認識する必要があるだろう。

（西川「訳者あとがき」クローバー／クラックホーン「文化という言葉の歴史」[1991：141]）

もっとも、西川に論難されたクラックホーンとて、別のところで「文化は必要を充足する手段を提供すると同様に、また必要を創り出す」、「文化は充足的であるとともに破壊的だ」などと述べ（クラックホーン／ケリー「文化の概念」[1975：114]）、（クラックホーンとケリーの共著論文を邦訳した）石田英一郎の文化観（「文化によって自然を征服したと誇る人間は、今度は自らの作り出した文化のために、かつて征服した自然の暴威に行く倍する強力な支配を受け、ついに、世界大戦と原子力の世紀に入って、その生存そのものを脅かされるに至ったのではあるまいか」、「統御の主体たる人間が、統御さるべき文化の鉄環の中にすでにガンジガラメに縛られている」[1967：29]）と近しい見方も提示している。文化という言葉に備わるイデオロギー性に直接切り込んではいないものの、クラックホーンがイデオロギー中立的な言辞を並べるばかりではなかったことも付言しておくべきだろう。

文献表

浅田彰

2001 「共同体の否定神学を超えて？」Web CLITIQUE

（http://www.kojinkaratani.com/criticalspace/old/special/asada/011001.html）

東浩紀

2007 「情報自由論2002-2003」『情報環境論集 東浩紀コレクション S』講談社 BOX

アーノルド（Matthew Arnold）

1946 『教養と無秩序』（多田英次訳）岩波文庫

石田英一郎

1967 「文化とは何か」『叢書名著の復興 3 文化人類学ノート』新泉社

1976 「文化の概念」『文化人類学入門』講談社学術文庫

イリイチ（Ivan Illich）

2005 『生きる意味「システム」「責任」「生命」への批判』（高島和哉訳）藤原書店

ウィトゲンシュタイン（Ludwig Wittgenstein）

1997 『「哲学的探求」読解』（黒崎宏訳・解説）産業図書

ウィリアムズ（Raymond Williams）

2011 『完訳 キーワード辞典』（椎名美智ほか訳）平凡社ライブラリー

ウォルツァー（Michael Walzer）
1996 「コメント 二つの自由主義」チャールズ・テイラー他『マルチカルチュラリズム』（佐々木毅他訳）岩波書店
エリオット（Thomas Stearns Eliot）
1971 「文化の定義のための覚書」『エリオット全集 5』（深瀬基寛訳）中央公論社
小田亮
2006 「文化人類学とカルチュラル・スタディーズ」綾部恒雄・桑山敬己編『よくわかる文化人類学』ミネルヴァ書房
鏡味治也
2010 『キーコンセプト 文化 近代を読み解く』世界思想社
クラックホーン（Clyde Kluckhohn）
1971 『人間のための鏡』（光延明洋訳）サイマル出版会
クラックホーン／ケリー（Clyde Kluckhohn and William H. Kelly）
1975 「文化の概念」（石田英一郎訳）リントン編『叢書名著の復興15 世界危機に於ける人間科学 上巻』新泉社
クローバー／クラックホーン（Alfred Louis Kroeber and Clyde Kluckhohn）
1991 「文化という言葉の歴史」（西川長夫ゼミ訳）『立命館国際研究14』
タイラー（Edward Burnett Tylor）
1962 『原始文化 神話・哲学・宗教・言語・芸能・風習に関する研究』（比屋根安定訳）誠信書房
ド・マン（Paul de Man）
2012 『読むことのアレゴリー ルソー、ニーチェ、リルケ、プルーストにおける比喩的言語』（土田知則訳）岩波書店
富山太佳夫
2003 「教養と国家」『文化と精読』名古屋大学出版会
野村達朗
1992 『「民族」で読むアメリカ』講談社現代新書
1997 「アメリカにおける多文化主義とその限界」『アメリカ研究シリーズ19』
松田素二
2009 「文化／人類学 文化解体を超えて」『日常人類学宣言！ 生活世界の深層へ／から』世界思想社
宮台真司
2006 『制服少女たちの選択 After 10 Years』朝日文庫

柳田國男
2000 「考へない文化」田中正明編『柳田國男 私の歩んできた道』岩田書院